

Title	史學入門覺書
Sub Title	Note on the introduction to the study of history
Author	今宮, 新(Imamiya, Arata)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.34, No.1 (1961. 7) ,p.83- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610700-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學入門覺書

今宮新

(1) はじめに

私はこゝに史學の理論やその研究法などについて、むづかしい議論をするつもりはない。我々が歴史の勉強をするにあたつて、いつでも問題になつてくることについて、私なりの考を少し述べてみようと思ふのである。それは歴史を研究する場合に際しての、深い研究と廣い研究とについてであつて、今から歴史を勉強しようとする若い人々に對して記すものであることを、最初におことわりしておきたいと思ふ。

近來所謂歴史ものが多く出版されて、歴史家は言ふまでもなく、小説家も批評家も、これに筆をとることが多くなつているのであるが、それは一般讀書界が、歴史ものを歓迎するためであり、また歴史専門家の研究が、益々その研究を深めて、いままでは及ばなかつた深い點まで、その研究を進めて行つたためであつて、必ずしも新

史料が発見されたためではないのである。このように歴史、それは日本史關係に限らず、東洋史また西洋史關係などの歴史についての興味が、一般に盛んになつて來たといふことは、いづれにしろ人間の過去の活動を知り、現在を理解しようとする慾求が盛んになつたことを示すものである。これは健全なる國民においては當然のことであつて、特に大きな動亂が起つた後においては、この傾向が強くなるように思ふ。

我々も終戦直後の茫然自失の状態から、ようやく自分をとりもどすと同時に、自分達の過去をふりかへつて、政治、思想、社會その他あらゆる面から、自分達をみつめようとするに至つたのである。歴史は如何なる時代において、絶えず國民より要求されるものであつて、過去をかえりみない民族は、必ず滅亡する運命にみまわれると言つても過言ではないであらう。

こゝ數年來、出版されている歴史書をみても、歴史全

般にわたるものと、特殊の問題についてのものといふ二つの傾向を認めることが出来る。これは現在だけでなく、いつの時代でも同様であるが、近來の全般にわたる歴史書をみると、各時代の専門家が、それぞれの時代、或は問題を分擔して、全體をまとめている傾向がみられるのである。例へばかなり以前に出た綜合日本史大系は各時代をそれぞれの専門家が執筆し、その後に出た新日本史大系は、各時代をさらに問題によつて、何人かのその方の専門家が分擔してゐるのである。この傾向をみても、一人の學者が全時代にわたつて、或はまたある時代だけでも全般にわたつて記述することが、困難な仕事であるといふことが分るのである。この場合とは、そのままあてはまらないと思ふけれども、我々の研究する場合でも、専門とする特殊の課題と、その時代全體との研究のつり合いが、いつでも問題となつてくるのである。

(2) 二つの課題

我々が歴史を研究し、また歴史を教えることを職業とした場合に、深く専門の問題を研究するといふことゝ、廣くその時代または歴史全般に眼を向けるといふ異つた二

つの課題に、直面することゝなるのである。このように全く相反するような二つの目的を、如何に處理すべきであらうか。これを完全になしとげることが、はたして我々に出来るかどうかといふことが、いつでも問題になつてくるのである。この傾向は、史學の研究が進んで、専門家の研究が微細な點まで深まつて行くにつれて、ますます甚だしくなつてくると思ふ。事實いまゝでの優れた歴史家についてみても、ほとんど大部分の學者は、その専門の部門において、すぐれた研究の成果をあげた人々であり、現在學界に活躍してゐる多くの歴史學者についてみても、同様であることは言ふまでもない。

さてこのように、深く研究すると同時に、廣く一般史に通ずるといふことは、如何に困難であるかといふことは分るのであるが、いやしくも歴史を研究しようとする者は、自分の撰んだ一定の研究題目については、極力その研究を深めて、独自の研究成果をあげなければならぬ。かくてその特定の問題に關しては、權威者となる覺悟を必要とするのであつて、こゝに初めて史學研究者として専門家となることが出来るのである。然しこれは言ふことは簡單であるが、實際には仲々容易のことではな

い。大學において或る問題を撰び、さらに大學院においてその研究をすゝめて行く人もあるだらうし、途中で題目を變更する場合もあり得るし、大學を出るとすぐ教壇に立つ人々もあるであらう。或はまた専門とは縁のすくない實社會に入る人々もあるであらう。こゝでは史學の研究に従事しようとする人々を對象としていることは言ふまでもないが、實社會に入る人々でも全く無關係のことではない。實際、實業界に入つた人でも、三十年間もこつこつ研究をつゞけて、立派な研究成果を擧げた人も居るのである。

大學、大學院を経て、一生を研究生活に送り得るめぐまれた研究者は言ふまでもなく、すぐ教師となる人々でも、自分の研究から全く離れてしまふといふことではないので、研究に關しては、良い環境に置かれたものと言ふべきである。従つてこれらの人々は、大學または大學院において研究した課題を、つゞけて掘り下げてゆく機会にめぐまれているのである。然し全時にまた、歴史全體についても、或は各時代についても、出来るだけ独自の立場によつて、概観する必要があるであらう。特に教師として若い學生を指導するといふ立場に立つた時は、こ

のことが必要となつてくるのである。事實我々も教壇に立つことになつて、特にこの感を深くしたのである。このような二つの課題を、我々は果して成就することが出来るであらうか。この點に歴史を研究するものゝ一つの悩みがあると言ふことが出来る。

(3) 小さい課題

歴史を研究しようとする人々は、少くとも先づ第一に、自分の研究しようとする課題を撰ぶのが普通である。初めから歴史全般について研究しようとする者は、殆んどないと言つてもよいであらう。かくて初めに、研究題目を如何にして撰ぶかといふことが、若い人々を苦しめることゝなるのである。この場合に二つの方法が考いられる。即ち一つは、學界において問題となつている課題を自分の研究課題として撰ぶことであり、その二は、自身で問題をみつけて、これを研究課題とするといふやり方である。勿論これは、はつきりと區別されない場合もあるけれども、結局この二つの方法があることには間違いないであらう。この二つの場合、いづれをとるかと言へば、後者が望ましいことは當然であつて、前者はそ

の課題の研究の價值を、全く學界の評價にまかしていると言ふことが出来るからである。

さて後者の場合、即ち自分で課題を撰ぶといふことは、一體どのようにすべきであるかが次に問題となつてくるのである。これに對して私は第一に、自分の興味のある課題及び自分の能力にあつた課題を撰ぶべきことを言いたいのである。如何に學界において問題になつている課題、または研究すべき價值のある問題として取り上げられている課題であつても、自分の興味を引かないものであれば、將來これを深く研究するといふことは不可能であらう。また多少興味があつたとしても、自分の能力の全く及ばないものであれば、この研究も十分な成果をあげることが出来ないであらう。然し研究をつゞけてゆく絶ゆるまな根氣があれば、必ずしも不可能ではないであらうけれども、非常な困難を克服しなければならぬであらう。第二は課題を出来るだけ限定して、比較的價値がないと思はれる問題でも、これを歴史的発展の中に研究して行くことである。學界ではさして問題とならないような課題でも、自分の興味あるものをとらえて、その研究を歴史的に發展せしめて行けば、こゝよりさらに多

くの問題が生じて、立派な研究成果をあげ得るといふ場合が、極めて多いのである。しかしして更にまた付言するならば、研究すべき根本史料が自分で讀める言語で書かれていること、即ち根本史料を自分で讀むことの出来ること、及びその史料を見ることが容易であるといふことも、課題を撰擇する場合には、考へなければならぬと思ふ。これ以外にも、まだ言ふべきことがあらうけれども、大體以上のことを心において課題を撰ぶことになるのであるが、その最初の試みは、まず概説書を讀むことゝ、大學における概説または特殊講議をよく聽講することであらう。若い學生の研究題目の撰擇が、教授の講議に影響されるゝところの多いことは、我々の最もよく知るところである。さてこのようにして、或る課題または或る時代に興味をおぼへることになれば、その時代に關する著名な歴史書に入るべきであらう。然し注意すべきことは、これらの多くの歴史書は、その著者の解釋によるものであり、またその時代の思潮を反映しているといふことである。或る學者は、各種の歴史書は、それが書かれた時代の思潮を知るに役立つに過ぎないと、極言しているくらいである。例へば、愚管抄や神皇正統記や、ま

たは讀史余論などをみれば、我々はこれを或る點までうかゞふことが出来るのである。

上に述べたように、歴史の研究に志す者は、まずその專攻すべき一つの課題を撰擇して、これに關する研究を段々に深めてゆき、その時代の歴史書よりさらに根本史料へと入つて行くことになるのであるが、この場合には史學研究法の知識が必要であつて、これを十分に利用し得なければならぬことは當然である。史料を批判する知識や能力は、史學の研究については第一に重要なものであるが、これはその専門の課題を研究しつゝある間に、研究法や古文書學等の知識を利用することによつて、初めてなし得るのである。ヤコブ・ブルックハルトは、かつて彼の意見を聞いた若いウエルフリンに對して、自由に使い得る時間の三分の一を史料を讀むことにあてゝることをすゝめたと云ふことである。史料の解讀が如何に必要であるかは、これを以てみても分ると思ふ。このようにして研究者は自分の専門の課題については、その研究を十分に深め、一應の權威となるべきである。そしてこの間に、史料に對する批判能力をよく獲得することが出来れば、自分の専門以外の問題についても、或る點

までこの批判能力を利用し得ると思はれる。史料の價値を如何に判斷するかといふ能力は、實際に自分で史料を取り扱ふことによつて養成されるものである。そしてこの價値判斷の能力によつて、他の時代の史料をも批判し得るものと思ふ。かくて専門の課題を深く研究して、學界の權威と認められる學者は、また専門外の問題についても、その眞相を見きわめることが容易であらうと考いられるのである。従つて史學を學ぶものは、先づ一定の課題を撰擇して、これに全力をそゝぐことが、第一に必要となつてくると思はれる。大學においては史學概論及び演習などが、これを學ぶ場所であることは言ふまでもない。

かなり以前のことであるが獨乙の大學では次のようになつていた。初級者には Proseminare (Sonderkurse) があつて、こゝでは Quellenlehre (史料學) や史料の解讀などが行はれてゐた。即ち歴史學の入門を受けるのである。この上に Seminare (Hauptkurse) があつて、こゝでは學生が學んだ研究法を利用して自分の研究を示すのである。この他に各時代にわたる全般的な講義や特殊講義のあることは言ふまでもない。

(4) 大きい課題

さて上に述べたように、若い歴史學徒は、その専門と

する小さい課題を中心として、研究に没頭すべきであるが、なほこゝに注意すべき問題がある。即ちそれは専門の一點だけに全力を集中してしまふと、一種の偏狭な判断におちいる危険があるといふことである。地中に寶を求めて深い穴に入りこんでしまつた者が、自分の頭上にある狭い一點の空だけを見て、美しい大空のあることを忘れてしまふが如き危険である。古代、中世または

近世、近代の一事件や一人物などの研究に没頭して、他の事件との關係、またはその時代全體との關係を全く忘却してしまふといふことである。言ふまでもなく、如何なる歴史現象でも、必ずその現象を起す原因があり、またこれが次の現象を起す原因となるのである。従つて歴史上の人物なり事件なりは、その時代の思想、社會、政治、文化などの一環として理解されなければ、本當の歴史的解釋とはいひがたいのである。過去の人物や事件に關する史料を、如何に解釋し批判し判断するかといふことが歴史家の任務である。しかし史料の本當の解釋は、その時代の思想や政治または社會を離れてはあり得ないのである。天智天皇や秀吉の政治上の活動は動かさない事實であるが、これが如何なる時代に、また如何なる結

果を起したか、大寶律令の編纂や貞永式目の成定は事實であるが、これが成立した時代を無視しては、これらの歴史的意義は理解されないのである。かくて、一定の研究題目を撰んで没頭すると同時に、若い研究者は廣く目を時代そのものに向けなければならないのである。

然し實際においては、自分の専門とする事件、人物または思想などの研究を深くつきすすんで行つた場合には、その時代の政治や思想や社會を研究するといふことが、當然行はれてくるのである。自分の専門の課題を中心として、その時代全體を見て、さらにまた全體から、その専門を深めて行くといふことは當然行はれてくるのである。こうみると、小さい専門の課題の研究と時代全體の研究は、決して相反する二つの課題ではないのである。即ち一つの課題の研究は、その時代全體の究明を意味することになるのである。かくて穴を掘る人の空は段々と開けて來るのである。そしてまた一時代を十分に理解するといふことは、他の時代をも理解し得るといふことになるのである。専門課題の十分の研究が、他の史的現象をも理解し得る方法になるといふことを、上に述べたが、時代に對しても同様なことが言はれると思ふ。

一民族の發展の過程をみると、各時代を通じて何か大きい要因とも見られるものがあると思ふ。例へば我國の場合などをみても、我國の地理的位置、氣候、國民の個性と見らるゝ性格などの要素が、各時代を通じて、我國の發展の歴史現象にあらわれていることが認められると思ふ。勿論各個人の影響のあることも、各時代を通じて認められるけれども、これらはいづれも日本人の性格をもつて活動しているものであつて、明らかに他の民族とは異なるものであらう。このことは西洋史などの場合においても同様であらうと思ふ。一時代の發展過程を十分に研明し得るといふこと、即ち時代を進展せしめて行く原動力、またはこれを阻止しようとする力などを明確にすることが出來たとすれば、他の時代についても、その發展過程の本質を把握することが出來るであらう。かくみれば一時代に關しての知識は、他の時代を理解するためにも必要かくべからざるものと言ふことが出來るのである。かくて研究者には美しい大空がひらけるのである。

さて先に、研究者は小さい課題より、さらに大きい時代への究明へと當然進んで行くといふことを述べたけれども、一時代を知るといふことは、その時代の時間的發

展過程と同時に、人間の廣い活動範圍についても研究しなければならぬのである。人間の進展は止まることがないと同時に、その活動は極めて廣範圍にわたるものである。政治的活動は言ふまでもなく、そのほか經濟生活をはじめとして、學問、藝術、科學、法律、宗教、技術、交通、商業、風俗、習慣等あらゆる方面に及んでいるのである。これらは或る時代を究明しようとするれば、いづれもその對象とならなければならない。これらの研究は、それぞれの専門家によつて、くわしく行はれているのであるが、その成果のすべてを知るといふことは、殆んど不可能に近いと言ふべきであらう。これらを綜合的全般的に研究する所謂文化史といふものが、極めてとほしいといふことは、このためであらう。然し我々は、この人間活動の廣い範圍即ち横への廣がりには注意すべきであつて、それは國內ばかりには止まらないのである。例へば我國の古代史や中世史を研究しようとするれば、古代支那の歴史を無視し得ないし、また近代史においては、西洋の政治や思想や文化を考えずして、これを理解し得ないのである。古代ローマ史におけるギリシヤ、獨乙中世史におけるフランス、イギリス、イタリアの關係の如きもの

である。かく考えると、或る時代を明確に把握するといふことは、また極めて困難な仕事であることが分るのであつて、自分の能力では不可能であるように思はれるのである。然し實際には一つの課題を研究している中に、自然と如何なる順序で、それらの専門書をみるべきか理解されて來るのである。即ち自分の研究に近いものから、段々と他に及ぶのである。例へば、中世または近世の政治事件や人物や制度に關する一部門を専門課題とする者は、その時代の政治、外交、學問、法律、宗教等の發展に目を向けることとなるであらうし、またこの時代の文化に關する部門に興味のあるものは、文化現象を第一に注意して政治現象は第二段となるであらう。兎に角、専門の時代の全體の縦と横の關係を常に注意すべきであらう。

(5) むすび

以上繰り返して述べて來たことを最後に要約すると、次のようになる。

(一) 歴史を研究しようとする若い人々は、自分に興味のある研究課題を撰んで、出来るだけ詳細にこれを研究

すべきである。この際に得られる史料に對する批判力は、他の専門外の課題についても應用され得るものである。

(二) 研究課題を中心として、その時代に目を向けなければならぬ。それは研究課題の眞の歴史的意義を理解するために必要かくべからざる研究である。また一時代を究明するといふことは、他の各時代をも理解し得ることとなるのである。更に言ふならば、民族の活動の眞相を把握することとなるのである。

(三) 研究者はその研究をすゝめて、自分の専攻以外の各時代についても、目を向けなければならぬ。それは言ふまでもなく、自己の専攻の時代は、それ以前の時代の繼續であり、またそれ以後の時代は、その結果とも言はれるからである。即ち人間のいとなみは時間によつて斷絶されるものでないからである。

(四) 時代の時間的進展過程を明らかにすると同時に、廣い時代相の把握に努めなければならない。人間の廣い活動を理解することによつて、専攻課題の眞の意義が明瞭にされるからである。

思はず長談義になつたけれども、もし今より史學を勉強する若い人々の何等かの参考になれば幸と思ふ。